

神奈川県立こども医療センターオレンジクラブ

ボランティアニュース



Vol. 199 2020年5月号

発行 神奈川県立こども医療センター オレンジクラブ事務局
編集責任者 ボランティアコーディネーター 加藤 悦典
〒232-8555 横浜市南区六ツ川 2-138-4 Tel. 045-711-2351 (代表)

ホームページ <https://orangeclub.kcmcvolunteer.com>

ブログ <https://blog.kcmcvolunteer.com>

e-mail kcmcvolunteer@kanagawa-pho.jp

新型コロナウイルス感染対策でボランティア活動の自粛が続いています。いつもと少し違う形での活動の報告です。

*「カリ先生とフラダンス」DVDで活動！ (重心施設支援課 小出)

DVDが届きましたあとと伝えるとスタッフからは大きな拍手！

こんな時だけどアロハな1日を送りましょう〜と1日が始まりました。ヒロちゃん、タカちゃん&ひなのちゃんの温かい笑顔、やさしい言葉にじーンと胸が熱くなります。おなじみのカウルヴェヒオケカイ♪。いつものご挨拶、♪アロハ〜マハロ〜アフイホー〜でみんなの心も和みます。曲がかかるとパツと顔をあげるお子さん、見ている間ニヤニヤしっぱなしの方も。みんなの笑顔があふれます。気持ちはすっかりアロハ〜ハワイ♪。

お忙しい中ご尽力いただき本当にありがとうございました。

感謝の気持ちでいっぱいです。皆様のご健康を願い、1日も早くすべての人々が穏やかな暮らしを取り戻せることを祈って、お会いできる日を楽しみにしています。

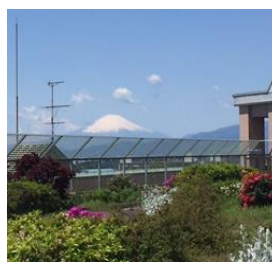


タカちゃん&ひなのちゃんの撮影風景

*作業グループの「かぶとと鯉のぼり」の折り紙作品をパウチし、こどもの日に栄養科の方がお食事のお膳にのせてくれました。楽しんでいただけましたか。



* 県立近代美術館やスタイリングライフから頂いた作品用の材料を、病棟に届けました



屋上からの
富士山と花々

ぼぼんた通信 No ㊿ きくちゃん

ぼぼんたのみんなはどうしてるかな～ 活動休止になって2ヶ月。活動再開の見通しはまだまだ先のような。そうだ、手紙を出そう！！背景はパソコンでかわいい花柄を選び、文字はポップ調で柔らかく、色は赤で力強く。まづまづのカードができた。切手は郵便局で花やキャラクターの楽しいものを選んだ。25人のぼぼんたメンバーの顔を浮かべながら宛名を書く。ポストに投函して、喜んでくれるかな。数日後、みんなから近況を知らせる便りが届いた。

‘免疫力を高める為の食物をモリモリ食べて太りぎみ’とか‘難しいパズルに挑戦中’とか‘孫と庭いじり中’とか‘読みたかった本をいっぱい読んでいる’とか‘手袋人形やパネルシアターの制作や修理’とか‘テレワークは退職後の生活練習かな？’等々。新型コロナウイルスの災いから逃れようと、楽しみの中で我慢と苦心をしている。いままで体験した事のない見えない者(物)への恐怖は目を追って高まるばかりだ。私が今できることは石鹸で丁寧な手洗い、うがい、適度な運動でこの恐ろしい病原体が近づかないように心がけよう。

今回、患者図書グループの村田氏が「全国患者図書連絡会報」に投稿した記事を皆様にも読んでいただきたく、許可をもらい掲載いたしました。

患者図書室ボランティアとして

神奈川県立こども医療センター ボランティアグループ・オレンジクラブ

村田 慶二郎

2008年3月、私は神奈川県立こども医療センターに組織されていたボランティアグループ、オレンジクラブに加わり、外来図書室（現在は患者図書室）のボランティアとしての活動を始めました。

神奈川県立こども医療センター(以下 KCMC)は、公立では国内で二番目の小児総合医療施設として1970年に設置され、図書室も同時期に開設されましたが、外来患者とその家族を対象にした外来図書室は、新棟完成後の2006年に、「患者さんとその家族に対して医療情報を提供する」という目的で、周産期棟への通路の近くに30㎡の小部屋で始めました。

私が病院ボランティアを志したのは、患者として通院していたある病院でIT化がすすめられており、それに対応できない人が再来受付の前で茫然とたたずんでいる姿を見受けたことによります。医療全般のIT化により高度医療を容易に受けられる時勢ですが、その時流に取り残されているお年寄りが多々存在するという現実からです。

そこで、病院の再来受付機のボランティアとして、そのような人の手助けを数年にわたって行って



きましたが、当初の高揚した気分も薄れてきて物足りない気分になってきた時に、県の広報に KCMC のボランティア募集の記事を見つけ、KCMC が自宅から谷を隔てた徒歩圏内にあるところからさっそく研修を受けました。その時は母親の介護の手助けをしていてすぐには加われませんでした。手が離れて再び KCMC を訪れボランティア登録をおこないました。そして、ボランティア・コーディネーターから、外来図書室のボランティアを紹介されました。私は現役時代には製薬会社の研究及び特許部門に属して、常に医療情報に接しており、本好きでもあるところから躊躇するところなく外来図書室に参りました。

その当時の外来図書室には、図書ボランティアと NPO 難病ネットワークから派遣されているピアサポートとがテーブルを構え、絵本類と医学書を収めたそれぞれの小さな本棚と大きなテーブルがおかれ、子どもの興味を引く玩具類など（どれも寄贈品）がいろいろあり、診察時間待ちのお子さんが玩具や絵本で賑やかに過ごしておりました。ボランティアの業務もお子さんとの遊び相手が主で、夏休み冬休み等の長期休みの期間中は子どもさんでゴった返しておりました。当時のオレンジクラブのホームページには、「小さなスペースですが、お子様と一緒にホッとできるそんな場所です。誰でも気軽にのぞいてみてください」と記載されております。

そんな外来図書室が大きな変化を遂げたのは、司書が図書の OA 化の課題を残しながら 2013 年に退職し、後任の司書がその解決に積極的に取り組んだ時です。医師・看護師の要望にそって図書室の IT 化を推進し、医学・看護系図書のオンライン検索を可能にするとともに貸出を開始しました。このことにより図書室は県の病院機構より表彰されました。外来図書室も一日貸し出しが始められ、ボランティアにも PC に対するある程度の対応が求められましたが、ボランティアの中には子供との接点を持つことが第一であるとの理解のうえに活動している人もあり、違和感を抱いた人は去ってゆきました。

時を同じくして KCMC が小児がんの拠点病院として全国 15 施設の一つに選ばれたこともあり、外来図書室も子供が読めるがんに関する図書を揃える必要がありました。

そして 2015 年には KCMC の方針として、外来図書室は「患者とそのファミリーが求める情報と資料の提供を第一として、絵本・玩具による子供への対応は第二とする」との方針が出され、大きなテーブルと賑やかな遊びの中心だった玩具類は整形外科受付ちかくのプレイ・コーナーに移され、空いたスペースには AYA 世代のお子さんに対応して学習机が 3 台置かれ、病気に関連した図書も増えました。

この結果、外来図書室から賑やかな子どもの歓声はなくなり静かな学習室になりました。そして、図書室には医療情報を求めて来られる方が増えて、ボランティアもこれに対応して希望の図書を検索する、さらに高度な依頼には司書を紹介する、依頼内容によっては同室の「ピアサポート」グループにつなげるなどを見極めるスキルも必要になりました。

2016 年には外来図書室の名称が患者図書室に変更され、また、入院・外来を問わず図書カードによる図書の貸し出しが始まりました。図書の貸し出しは PC を介して行うためボランティアにはその操作のためのスキルが必要になりました。患者とその家族に対する図書の貸し出しは順調に推移して利用者を増やしております。このように私の図書ボランティアとしての活動は KCMC の変革の波を受けて、大げさに言えば木の葉のごとく翻弄されてきましたが、前職の経験から特に臆することなく立ち向かうことができ、気が付けば十有余年を過ごしてきました。

今、KCMC はクリスマスの飾りに溢れています。いろいろな色合いの大きささまざまなトナカイがセンター内を飛び跳ねております。一体何頭いるのでしょうか。これは 30 余りあるボランティアグループの一つ、手芸クラブの労作です。そして、年末にはすぐさま正月飾りに大変身し、来春には子どもたちを獅子舞いが出迎えてくれます。その獅子の数は、16 頭、いやもっといます。図書室前の廊下には

オレンジクラブ員の手作りの品がワゴンで販売されていて、その収益がすくなくならずボランティア活動の手助けになっています。

KCMC のボランティアとして、様々な出会いと別れを重ねてきました。図書ボランティアの仲間では、ストレッチャーに身を委ねながら子どもたちに明るく声をかけていた筋ジストロフィーの若かったM君、今は瀬戸内で静かに眠られています。ダウン症のMさんは、屈託のない笑顔振りまいていまも元気です。

前述のように KCMC には 350 人あまりの仲間がおります。様々なエプロンがセンター内を闊歩しております。一堂に会することは不可能ですが、年に 2 回開催されるバザーはそのチャンスの時です。忘れておりましたが、もう一人いやー頭かな、国内最初のファシリテードッグを卒業した「ベイリー君」もです。

私は図書室と共に外来のボランティアとしても KCMC の玄関に立ち、子どもたちとその家族に笑顔での出迎えを行っております。子どもたちは、家族の方の一刻でも早く受付を済ませたい気持ちにお構いなく、オリガミのコーナーに駆け寄り、ボランティアが持ち寄った色々なオリガミを手に入れようと夢中です。

作品は全国の方からも送られてきます。数百を超えて送られてきた指輪（オリガミの）が届いた時には「泥棒に注意」の張り紙がつけられて大笑いでした。十二支をオリガミで巧みに作った Y さんの優しい笑顔と言葉はいつまでも忘れません。ボランティアから仕事に復帰された T さんは毎週、時には夫君の手伝いを受けながらエンピツのオリガミを送ってきてくれます。もう 5 年以上になります。見ただけで、作者が分かる腕時計のオリガミは介護のために新潟に移られた K さんから。一枚のオリガミから一体、何羽のつるが折られているのか、と子どもに渡すのが惜しくなるような芸術的なオリガミ。季節・季節の絵が丁寧に描かれたトトロ、それはそれは大勢の方々の手になるオリガミに子どもたちに代って感謝です。2 カ所の病院で週 2 回の十有余年にわたるボランティア活動は、私にとって今や生活の中心です。

図書室で席をおなじくするもう一つのボランティア、「ピアサポート」の人たち、彼らは東京にある難病ネットワークの人たちです。彼らはかつて、いや中には今も厳しい状態に置かれた子どもを持っておられる人たちです。厳しさを乗り越えてきた自らの体験を「ピア」として語ることによって、日々不安を抱えながら KCMC を訪れている若い親御さんの悩みの解消の手伝いをされておられますが、この人たちに会うことは私にとっても楽しみです。お茶を飲みながらの会話が弾みます。ローテーションが決まってないので、今日はどなたに会えるのかとその到着を待っています。

小 6 から社会人になって去っていった T 君、重い障害を抱えながらも強気をとって、緑茶が大好きで診察日の度に図書室を覗いてくれました。彼は IT の技術を生かして企業で働きだしましたが、元気にやっているのかと案じております。

かつては徒歩圏内であった KCMC も今では優待パスのお世話になっておりますが、このさき、いつまでボランティアを続けられますか。



もうしばらく新型コロナ感染対策は続きます。入院している方、通院される方、ご家族の方、職員の方、そして、ボランティアの方皆様、どうかみんなでの状況を乗り越えましょう。

ボランティアコーディネーター 加藤 悦與